

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

だが、彼等の準備が整いつつあつたタイミングで、〈ブレケース〉が各地で撤退を始めた。それは状況が次の段階へと移行しつつあるのかもしれない、というファフロウ姉妹の意見を、しかし中央政府は取り合わなかった。

やむを得ず、自由に動ける立場であるファフロウ姉妹に状況の確認を任せ、残されたメンバーはそれぞれの時を過つこしていたのだが……それは束つかの間の平穏でしかなかった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

平和な時代における軍隊や警察など、一般市民からすれば嫌われ者——とまでは言わずとも、好感情は持たれにくい存在である。武力や権力を持つ集団は、それを持たない人間からすればヤクザと変わらないからだ。

それは此処——惑星ゼヘナにおいても変わらない。

軍隊こそ存在しないが、市民の安全を守るのは警察の仕事である。

しかし、〈カタストロ〉という脅威を駆逐するのは〈機獣少女〉の仕事であり、警察の出る幕はない。精々が避難誘導や交通規制を行う程度で、つまりは後方支援が主である。なので、ゼヘナにおける警察の印象は、やはり日本などと大差がない。

平時は国家権力と煙たがられ、事件が起きれば対応を非難され、不祥事が発覚すればこそぞとばかりに叩かれる。

だがそれでも、シュウジ・オオタキに不満はなかった。

オオタキは警察官だ。警察学校を卒業した訳でもなく、特別な縁故や才能もなく、

出世コースに乗る事は早々に諦め、定年を間近に控えた今の階級は巡査部長。

平々凡々な『街のお巡りさん』である。

故郷であるオオミヤ・シテイの交番に長年勤務し、地域住民にも比較的、顔を知られている。

「——平和だなあ……」

ようやく避難命令が解除され、普段通りとまでは言えないまでも、普段通りの生活を再開しようとする街の人々の姿を眺め、初老の巡査部長は感慨深そうに呟いた。

ちなみに、そんなオオタキの独り言を背中であらう聞いている若い同僚の手元の紛失届の裏には、『正』の字がいくつも書かれているが、これは今日のオオタキの独り言の回数である。別に意味などなく、それくらいしかする事がないのだ。

税金泥棒と呼ばれる事に忸怩たる想いはある。それでも、〈フレケース〉襲来に端を発したこの数日間の事を思うと、やはり自分達は暇なくらいがちょうどいいのだ。平和であれば、自分達は税金泥棒でいられる。人々の不満やストレスの捌け口として、嫌われ者を演じるのが平和な時代の警察の仕事なら、むしろその方がいい。

機獣を兵器として使った時代が、記憶どころか記録としても曖昧になってしまったゼヘナでは、平和な時代が永く続いた。〈カタストロ〉という新たな脅威も、〈機獣少女〉の存在によって脅威ではなくなった。オオタキは平和な時代に生まれ、育ち、警官になっても大きな事件に遭遇する事はなく、平穏なまま人生をまっとうするものだと思っていたが——〈フレケース〉の襲来がそれを許してくれなかった。

初めて他人の死を見た。

冗談のように人体が破壊され、血が流れ、肉が裂け、骨が砕かれるのを見た。

何も出来ない——通常装備の警官であれば当然だが——自分達の代わりに、〈プレケース〉と戦う〈機獣少女〉達の姿は凄惨せいさんだった。

〈カタストロ〉とは明らかに違った異形と心構えもなく戦わされ、年端も行かない少女達が恐怖の表情を浮かべ、それでも逃げる事を許されない。

この数日はあちこちの現場に駆り出されたが、それでも本当に危険な目に遭あうのは警官ではなく〈機獣少女〉だった。彼女等でなければ、〈プレケース〉に対処てき出来ない。

本来は護るべき少女達に犠牲を強しいてまで必要とされるなら、平和な世の中で税金泥棒呼ばわりされる方がいい。

それが〈プレケース〉襲来を経験したオオタキの出した結論だった。

幸い、〈プレケース〉は惑星全域から撤退を開始したらしい。だからこそ、このエリアの避難命令が解除され、街には人々が戻り、オオタキも交番でその光景を眺めていられる。

「本当に……平和が一番だな——」

オオタキの独り言が聞こえたらしい若い同僚が、手元の紙に『線』を書き加えようと。へんに手を伸ばした。

その時——

「っ!？」

席を立てて大通りを眺めていたオオタキの目の前を閃光が奔はしった。

わずかに遅れて爆発と衝撃波が生まれ、オオタキは反射的に目を閉じ、両腕を顔の前に翳かざした。爆風で服が激しくはためくが、耳を劈つんぎく轟音しか聞こえない。小石ほどの何かなが時折飛んできては、腕や身体からだにぶつかる感覚を覚えるが、確認する余裕もない。

数秒して、再び目を開いたオオタキは、目の前の光景に言葉を失なくした。

閃光が削り取っていったように抉えぐられた道。

大通りに立ち並ぶ、半壊——跡形もないものも多い——した建物。

それらの落下物から生まれたであろう大量の瓦礫がれき。

「……………」

何が起きたのか理解出来ない——いや、目の前の惨状から、理解する事を無意識に拒否していた。すでに〈プレケース〉という危機は去ったのだ。これ以上の事件など起きるはずがないのだ。

だが、オオタキは思考停止を続ける事を許されなかった。

「……………」

わずかに聞こえたのだ。助けを呼ぶ誰かの声。

オオタキは必死で自分を奮い立たせ、まず同僚に声をかけようとした。まだ若い、どちらかといえば軟弱なタイプなので、^{すく}疎んで動けなくなっているかもしれない。一刻も早く彼を連れ、救助活動を行わなければならない。

しかし――

「……………」

オオタキはまたも言葉を失った。

若い同僚は先ほどの爆発で飛ばされてきたであろう看板によって、上半身を押しつぶされていた。確認するまでもなく即死だっただろう。もし席を離れていなければ、オオタキも同じ末路だったはずだ。

自分だけが助かってしまった罪悪感をひとまず棚に上げ、オオタキは交番を出た。

助けを求める声は、あちこちから聞こえた。

血を流して横たわる会社員風の男性。親とはぐれたらしい泣きじゃくる幼児。意識のない赤ん坊を抱き、必死に呼びかけ続ける女性。性別も、何を言っているかさえ判別不可能な声は、瓦礫^{がれき}の下敷きになっている者達だろう。

「……………ああ……………!?!」

どうすればいい？ 誰から助ければいい？ 症状の重い者からか？ それとも確実に救える者からか？ 処置をするなら前者からだが、オオタキに医療の心得などない。研修で習った応急処置くらいしか出来ない。この状況であれば、すぐに災害救助の専門チームが来るはずだ。だったら、現場の一警察官がするべきは、自力で動ける人々の避難誘導だろう。

オオタキはそう考え、即座に行動に移した。声を張り上げて避難先を指示し、時には怒鳴り散らしてでも恐慌状態の者を落ち着かせ、逆に優しく勇気づける事もした。

そうして一人、また一人と、市民達がその場を離れていく。余裕がありそうな者には負傷者の介添えを頼み、かなりの人数を避難させられた。それでも全員ではない。ここからは残った怪我人の応急処置をしなければならない。それをするかどうかで、助かる可能性は変わってくる。逆に言えば、応急処置が遅れば遅れるほど、助かる可能性は下がっていく。

救急セットの保管場所を思い出しつつ、オオタキが交番に戻ろうとした瞬間――

「……………なんだ？」

嫌な気配。

本能的な恐怖を感じ、オオタキは周囲を見渡した。

「……………」

何か。

見えない何かに囲まれている。

——キィンヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

「!？」

異音。

同時に、先の閃光で抉られた地面から、次々と巨大な蠍の化物が姿を現した。

色は全体的に灰色。胴体は普通自動車くらいだろうか。左右に張り出した四対の節足で胴体を支え、地上に出られた事を歓喜するように、巨体に見合う大きな鋏を備えた腕を掲げ、見せつけるように開閉を繰り返す。

ほんの少し前は雑踏を行き交う人々で賑わっていた大通りに、今は瓦礫と巨大な蠍の化物が溢れていた。

「……………」

もはや言葉が出てこない。理解を超えた状況と、何も出来ない無力感に、ただただ気力が萎えていく。

彼等が何を目的に現れたのかは判らないが、友好的な存在でない事だけは理解出来る——いや、識っているのだ。ゼーナに生まれるすべての生き物の本能に刻まれている。

あれは敵なのだ——と。

やがて、近くにいたオオタキの存在に気付いた蠍の一体が、ゆっくりと彼に迫る。鼻先が触れる至近距離でオオタキを矯めつ眇めつ——まるで精査するように——すると、おもむろに彼の腹部に鋏を突き立てた。

「!!？」

極度の緊張と恐怖による結果か、痛みはよく判らなかった。それでも、出血と共に命が流れ落ちていく実感だけはあった。

朦朧としていく意識で、せめて自分を殺そうとしている相手を睨み付けてやろうと、オオタキはわずかに残った気力を振り絞った。だが、蠍の頭部は無機質な装甲で覆われており、表情はおろか、顔すら見えない。

見えないはずなのだ。

しかし——

(啜ってやがる……)

オオタキの目には、見えないはずの蠍の表情が確かに視えた気がした。

凶器以外の何物でもない一对の鋏に解体されながら、オオタキは思いを巡らせた。避難した人々は無事だろうか？ 怪我をしていた者も多かったが、避難先までたどり着けただろうか？ ふと見渡せば、自力で動けない、動かしては危険な状態の者達が、自分と同様に蠍の化物に蹂躪されている。

無念だった。

自分が死ぬのは、まだいい。

仕事上、そういう覚悟も一応はしていた。

だが、目の前の人々はそうではない。

(嗚呼……)

誰でもいい。自分の代わりに、彼等を助けてほしい。

他力本願なのは百も承知だ。

それでも……。

「——うわあああああああああああああああああああああああああああッ!？」

不意に聞こえた大音声。

まるで気付けと言わんばかりの、悲鳴にも似た叫び。

オオタキを蹂躪していた蠍が反射的に頭上——声が聞こえた方向に視線を向ける。装甲に隠れて見えないが、やはり感覚器官の類は頭部に集中しているのだろう。

頭上から落ちてきた何かがおオオタキの眼前を通過した。

同時に、蠍の一对の鋏が腕ごと地面に叩きつけられた。

——ギィンシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?

悲鳴を上げる蠍。

呆然とそれを見つめるオオタキ。

すつくと立ち上がるチャイナ服のような衣装の少女。

多量の出血によって朦朧としているオオタキだが、おおよその状況は理解出来た。彼女が頭上から現れ、着地するタイミングで蠍の腕を叩き潰したのだ。

「——滅せよッ!」

すかさず手にした戦斧を蠍の頭部に叩き付け、発動言語を唱える少女。

(機獣少女……)

惑星ゼヘナの守護者にして、人々の心の拠り所。

現代の戦乙女。

まだ中学校に上がっていないだろう年端も行かぬ容姿だが、次第に薄れていくオオタキの目には彼女が、舞い降りた救いの女神に見えていた。



まったくもって、ついていない。

「フレケース」の撤退によって、ようやく厳戒態勢が解除され、今日の待機シフトからも外れた彼女は、後輩に声をかけて共に街に出ている。本来、未成年である彼女等は自宅待機のはずだが、それを律儀に守れというのも酷だろう。真面目な性格故に渋る後輩を半ば強引に連れ出したまではよかったが——其処で蠍の化物の群れと出会う羽目になってしまった。

（こんな事なら自主トレでもしていればよかった）

おとなしく自宅待機するという発想はないらしい。

チャイナ服のような大胆なスリットが入ったMBジャケットを身に纏い、手には先端に青竜刀のような幅広の刀身を付けた槍——彼女は「機獣少女」だ。

年齢は中学生くらいだろう。小学生ほどの幼さはないが、高校生ほどの艶やかさには欠ける、恐らく個人差がもつとも激しい年頃である。

（あの子は先に行ってしまうし……）

「機獣少女」は斧型のMBデバイスを使う後輩の「機獣少女」。最近になってようやく判った事だが、彼女は足が速い。あんな重量級の得物を持って、よくもまあ、あの速度が出せると感心するくらいだ。

それはそれとして——

（あの蠍の化物は何だったのかしら……）

既存の生物を大型化したような（カタストロ）とも、様々な昆虫の特徴を組み合わせたような「フレケース」とも明らかに違っていた。まるで人工的に造られた機械のような、灰色の巨大な蠍。

機獣——という言葉が少女の脳裏に浮かぶ。

（……まさかね。すべての機獣はコアを抜かれて、機体は廃棄されたはずだもの）

そう結論付けようとして、嫌な話を思い出す。自分達の住む東方大陸にある、『封鎖区域』と呼ばれる文字通り立ち入りを禁止されている場所。其処にコアを体内に宿したまま封印

されている機獣が存在するらしい。

誰もが知っている、ただの都市伝説……そのはずだ。

考えても仕方ないと、蠍さそりの化物の正体の事は一旦忘れ、後輩に追いつくべく急いだ。
「……見つけた」

この街のメインストリートと呼べる大通り。しかし、地面は巨大な掘削機ドリルが何かに削り取られたように抉えぐれ、通りに面した建物も、半壊した程度ならまだマシといった様相を呈ていしていた。恐らく、此処ここが今回の被害の中心地だろう。其処そこに、自分と同じ意匠デザインのMBジャケットを纏まとった、見慣れた少女の背中が見えた。

「……………!?!」

後輩の〈機獣少女〉の間近に来て気付いた。周囲の瓦礫がれきに、蠍の化物を構成していたであろう部品パーツが大量まきに紛まぎれている。集めて組み上げれば、少なくとも見積もっても十体分くらいはある量だ。

「……………」

これを彼女が一人でやったというのだろうか。姿を見失って五分も経っていない。そんなわずかな時間に……。

無我夢中だった。

呼び止める先輩の言葉を無視して、先に大通りに着くと蠍さそりの化物が此処ここにもいて、逃げ遅れた人達が襲襲われていた。

気付いた時には飛び出して戦バトル斧バトルを振るっていた。

でも、誰も助けられなかった。

「……………あ、あの——」

虫の息だった初老の警官に駆け寄って声をかけようとして、何を言えはいいか判らなかつた。明らかに助からない。医療の心得があるとかいう以前の問題だ。腹はらを裂さかれ、見えてはいけないものが顔を覗のぞかせてしまっていた。

「……………」

初老の警官が、今にも閉じてしまいそうな瞳まなこでこちらを見上げている。その表情に恐怖はなく、ただ静かに、最期の時を受け入れようとしているように見えた。

名前は知らないが、戦バトル斧バトルの少女は彼と面識めんしきがあった。この数日の〈ブレイクス〉事件において、よく顔を合わせていたのだ。

ただそれだけ。

ほんの少し言葉を交わただけで、彼は覚えてすらいないかもしれない。戦ってくれてありがとう——この初老の警官にしてみれば、なんでもない一言だったはずだから。

「……え？」

彼が何か言おうとしていると気づき、少女は慌てて耳を近付けた。

「——」

結局、彼が何を伝えたかったのかは聞き取れなかった。それでも、死に際に残した表情を見れば、どんな気持ちで逝ったかは判る。

「——知っている人だったの？」

背後から向けられた大人びた少女の声に、しかし戦斧ハルバードの少女は驚かない。気配で誰かも気付いていたからだ。青竜刀の付いた槍スピア使いの、先輩（機獣少女）である。

先輩の少女の言葉に、背中を向けたまま後輩の少女はこくりと頷く。

「そう……」

背後から聞こえる声はそれきりで、彼女は無言で戦斧ハルバードの少女の隣に並ぶと、腰を落とす。同じ視線で初老の警官の表情を見た。

「こんな事を言っていないか判らないけど」

「……？」

「あなたに看取られて逝いて、この人は救われたと思う」

「……………」

先輩の少女の言葉を聞き、初老の警官の満ち足りたような表情を見つめ、戦斧ハルバードの少女はようやく涙を流して泣いた。

第二十六話

『アビキョウカン』

のどか
ランチタイム
長閑だった昼食時は唐突に終わりを告げ、食後の運動と呼ぶには過激な時間が始まっていた。

「——ふッ」

短く息を吐き、カナコ・T・シングウジが駆ける。

姿勢は低く、一瞬で加速し、すれ違った直後に敵が倒れる。時代劇やアクション作品でよく観られる映像表現だが、画面を通さない現実だと、見た目に地味な事この上ない。

だが、実戦に派手さなど必要なく、機力の容量の少なさをカバーするために極力、無駄を省く必要もあった。そういった身上と事情が合致したのが、東方大陸に伝わる武器・カタナを使った剣術だった。

ひたすら速く。最適な箇所に、最適な角度で、最速の一撃を叩き込む。

何も考えない。この瞬間、自分は一振りのカタナなのだ。敵を駆逐するだけの存在。それ以上でも以下でもない。

一体、また一体と、すれ違う度に敵が骸むくろになっていく。
死屍累々ししるいろう。

会敵からわずか数分にして、カナコが通った跡あとは、そう表現するに相応しい光景となっていた。

「——」

黒い袴はかまと白い振袖ふりそでのMBジャケットを纏まとったカナコは、愛機であるカタナ型のMBデバイス（スサノオ）そのものといった雰囲気まじで、視線を向けられるのは、カタナの切っ先を突き付けられているのと同義だった。

——ギイイイ……。

言葉は通じなくとも、やはり生物なのだろう。本能が危険を察したのか、敵に動揺する気配が見られた。

敵——自分達の知っている概念を当てはめるなら、それは『蠍さそり』だ。東方大陸には生息していないが、凶鑑などで見る機会はある。平たい胴体に八本の節足せつそく。更に鋏はさみの付いた腕と、毒針の付いた長い尾が生えている。ザリガニと蜘蛛くもを足して二で割ったような生き物というのがカナコの印象だった。

しかし、目の前の蠍は巨大で、胴体だけで普通自動車ほどのサイズである。

そして——生物感がない。正確に言えば、人間や他の動物のような有機生命体らしきがないのだ。まるで金属で構成されているような身体からだで、例えるなら機械生命体——そう、

かつて惑星ゼヘナに存在した機獣も、こんな姿だったのではないだろうか。

「……………破あッ！」

——つ!?

雑念を払うため放ったカナコの声を威嚇いかくと感じたのか、蠍さそりの群れが怯えるような挙動を見せた。(カタストロ)や(プレケース)とは別種の存在のようだが、やはり生物なのだろう。自らの生命に危機感を覚えれば恐怖する。

「……………なんだっていいわ——」

敵を駆逐する。

今の自分はそのためのカタナであればいい。

カナコは自分に言い聞かせ、ちらと後方に視線を向けたが、すぐさま思考を切り替えた。

雑念は刃やいばを曇らせる。

先ほどの閃光も、急に大量発生した蠍の化物も、正体になど興味はない。

ただ前に出て、斬って斬って斬りまくる。

それこそが(戦姫)の本領発揮だ。

大量発生した蠍の化物を相手に、一步も引かず、むしろ圧倒して見せるカナコの一騎当千ぶりに、橘アサトもまた圧倒されていた。

彼女の戦う姿を見るのは二度目だが、今回は実戦——暴走したクラウとの戦闘も実戦のようなものではあったが——つまり、命の奪い合いだ。

勝手なもので、相手が自分達を脅かす敵であっても、人間は殺すという行為に否定的な感情を抱く。『残酷だ。なにも殺さなくても』——そんな風に。

だが、アサトは目の前の光景に恐怖を感じない。

正確に言えば、淡々と敵を切り捨てていくカナコに対して、怖いという感情が湧かない。

それは偏ひとへに、カナコが無心でカタナを振る姿が綺麗だからかもしれない。

「——綺麗ですよね」

不意に隣から聞こえたツバキ・タカチホの声に、アサトは心を読まれたのかと内心でぎよつとした。

「あ、こんな言い方は不謹慎ですよね。でも、カナコさんが戦う姿を見ていると、純粋にそう思ってしまうんです」

アサトが無言なのを勘違いしたのか、ツバキは困った表情を浮かべてそう言った。

デザインこそ違うが、彼女もカナコ同様、和服とミニスカートを組み合わせたようなMBジャケットを纏まとっており、愛機である〈カグツチ〉も、待機モードの勾玉まがたまからデバイス・モードの薙刀なぎなたに変わっている。

「いや、そうじゃないんだ。俺も同じように思ってたから、心を読まれたんじゃないかって驚いただけで」

「そうだったんですね……よかった」

心底ほっとした——そんな安堵あんどの表情を浮かぶツバキに、アサトは苦笑した。

大人びていても、名なうての戦士であっても、本人は見た目通りの小学五年生の少女なのだ。誤解されるのが怖い、嫌われたくない、そんな風に思うくらいには。

「——ん？」

ぼったぼったと黒い蠍はみそりの群れを斬り捨てていたカナコが、小休止のためか動きを止め、ちらとこちらに視線を向けた。何かのメッセージかと思いつバキの方を見ると、彼女は応えるように軽く頷うなずいて見せていた。やはりアイコンタクトだったのだろう。ただそれは、高度な作戦のやり取りというより、単純にこちらを気にしてくれただけだったのかもしれない。

次の瞬間、カナコは再び、一振りのカタナそのものとなっていた。

一瞬で敵に迫り、すれ違い様に斬り捨て、それを淡々と繰り返す。

派手さはないが、無駄のない最小限の動きを見ると、一種の『舞い』のように感じられる。人気のない公園の敷地で、周囲には大量の蠍の残骸、一つ向こうの通りからは煙が上がっているような舞台ではあるが、それでも——

(綺麗だ……)

アサトはそう感じずにはいらなかった。

「——カナコさんは、私と同じ養護施設の出身なんだそうです。と言っても、歳が離れている事もあって、同じ時期にはいなかったんですが」

唐突に、脈絡のない発言がツバキの口から出た。

非武装のアサトを確実に護るため、速攻型のカナコが積極的に周囲の敵を排除し、

オールラウンダー

万能型であるツバキが直掩ちよくえんに付くという役割分担となったのだが、すでに蠍の群れ

は激減し、ツバキには雑談をする余裕がある——とはいえ、やはり今の発言に至った理由は判らない。

「私の場合は両親がいましたが、カナコさんは身元不明で、十二歳の時に東方大陸の荒野で発見・保護されたそうです」

「……ツバキ？」

ツバキは普段通りだ。口調も、表情も、普段と変わっていない。普段と同じ、穏やかな澄まし顔で、小学生とは思えない大人びた話し方だった。

「橘さん、ゼヘナに来て初めて会った時から、カナコさんを気にされてましたよね」

「それは、まあ……」

「行方不明になった妹さんと同じ名前だったからですよね」

「……ああ」

蠍の群れが現れる直前の事だ。話の流れで、ツバキの相棒であるMBデバイス（カグツチ）に訊ねられた——妹の名前は何かと。

答えは『橘カナコ』。

アサトより三つ年下の、彼にとっては唯一の兄妹。三年前に行方不明となり、生きていれば十五歳になっているはずだ。

ゼヘナに来て、アサトが最初に出会ったのがツバキと共にいたカナコだった。行方不明になった妹と同じ名前の少女。雰囲気はだいぶ違うが、東洋系の整った顔立ちに加え、髪と瞳の色も一致する。だが、年齢に齟齬があった。カナコは高校二年生——十七歳らしい。

「カナコさんも橘さんを気にしていました」

「え……そうなのか？」

「はい。カナコさんは発見当時、記憶喪失で、自分に関する事は二つしか覚えていなかったそうです。大好きなお兄さんがいた事と、『カナコ・タチバナ』という名前だけ」

「……………」

ちなみに、『シングウジ』というのが養子縁組をした両親のファミリーネームである事も、ツバキは補足してくれた。

「私の考えはこうです。カナコさんは五年前、今の橘さん達のように、地球から転移して来た。そして、その際に地球で生まれ育った記憶を失ってしまった」

アサトは黙ってツバキの言葉を聞いた。

「つまりカナコさんは——行方不明になった橘さんの妹さんではないでしょうか」

これはカナコも同じ考えであるらしい。それがアサトの妹の名前が判明した事で、この説の信憑性が高まったと考えているのだろう。

「けど、妹が生きていれば、まだ十五歳のはずだ」

地球でアサトの妹である『橘カナコ』が行方不明になったのが三年前。ゼヘナで〈機獣

少女として活躍している『カナコ・T・シングウジ』が保護されたのが五年前。どちらの『カナコ』も当時十二歳だが、二年の時間差がある。

しかし、これにもツバキは回答を用意していた。ツバキ自身が転移現象を経験し、地球からゼヘナに帰還した際、地球に滞在した時間と、ゼヘナから消失していた時間に、かなりの誤差があったらしい。具体的には、地球に滞在していたのが八日間なのに対し、ゼヘナに帰還した際には二十時間ほどしか経過していなかったそうだ。つまり、アサトの妹が転移によってゼヘナに来たのなら、『橘カナコ』と『カナコ・T・シングウジ』の年齢の誤差は、二人が同一人物である事を否定する根拠にはならないのだ。

「そうか。だとしても、同一人物だって決定的な証拠みたいなものはないんだよね？」

「……はい」

アサトの問いに、ツバキはやや伏し目がちに答えた。彼女自身、可能性を繋ぎ合わせた仮説でしかないと判っているのだろう。決定的な確証がない。現状では、誰にも、どうする事も出来ない。

それでも、アサトは嬉しかった。自分とカナコの事を慮った上で言ってくれたのだから。

「あ……」

だから、せめてそれだけでも伝えたくて、アサトはこの優しい少女の頭をそっと撫でた。

「ありがとうな」

「い、いえ………あう」

されるがままに頭を撫でられ、頬を羞恥の色に染める姿からは、彼女が〈難攻不落〉の二つ名で知られる〈機獣少女〉だとは誰も思わないだろう。大人びた澄まし顔を崩された今のツバキは、何処にでもいる普通の小学生五年生の少女だった。

「……良い雰囲気のところを邪魔するようで大変恐縮ではあるのですが——」

『!』

突然の第三者の介入に、アサトとツバキは同時に互いから距離を取った。

鬱陶しい蠍の化物の群れを一掃したかと思えば、なんとなく面白くない状況になっていた。

妹のように可愛がつている後輩が、兄かもしれない少年から頭を撫でられている——た

だそれだけの光景。

それが、なんとなく。本当にただ、なんとなく面白くなかった。

「……良い雰囲気のところを邪魔するようで大変恐縮ではあるのですが——」
『!?!』

声をかけると件の二人——ツバキとアサトは、同時に互いから距離を取った。その動きが完全に同調シンクロしており、なにやら気まずい様子を感じさせるのが、余計に面白くなかった。

カナコが前衛でツバキが直掩ちよくえん。

それはカナコ自身の発案による適材適所の役割分担だったが、こうして終わってみると損な役回りである。何か話していたようだったが、ツバキとアサトの会話内容は当然、戦闘中のカナコに聞こえるはずもない。

（私、がんばったのに——え？）

自分の思考を疑った。

感謝されたくて《機獣少女》になった訳ではない。名が知られるようになっても、人気や評価など気にした事がなかった。

それなのに——

（私、彼に褒めてほしかったの……？）

ツバキが頭を撫なでられているのを見て、羨うらやましいと思ってしまった。

昨日、彼にそうされたように、またしてほしいと思ってしまった。

「……………」

そんな事は口が裂けても言えないが。

「おつかれさまでした、カナコさん」

「……ええ」

労ねぎらいいの言葉をかけてくれるツバキに、普段であれば微笑ほほえみ返すところだが、今はそんな気分になれなかった。

「ほら、橘たちばなさんからも」

「え？ あ……………」

ツバキが水を向けると、アサトが何か言いづらそうに口を開いた。

「実戦でもすごいんだな。いや、昨日のクラウドとの戦いも見てたけど、今日のはなんといつか……………」

「e」

アサトが何を言いたいのかわからず、カナコは不思議そうに続く言葉を待った。

それに観念したのか、アサトは深く息を吐き、こちらを真つ直ぐに見つめた。

「すごい……綺麗だった——」

「……………」

不意打ちのようなアサトの言葉に、カナコの思考は完全に停止フリーズしていた。

「……橘たちばなさん、妹さんまで口説くつもりですか？」

ツバキがアサトにジトつとした視線を向けた。

「ま・で・つ・て何だよ。口説いてないし、まだ妹だつて確定もしてないだろ」

「それはそうですけど……。とりあえず、やみひめさんには報告しておきますね」

「……勘弁してくれ」

未だ固ましまったままのカナコには、二人の声も聞こえていなかった。



オオミヤ・シティ。

東方大陸中心部に位置する、同大陸の首都である。

東方大陸はシティごとの自治権が認められており、序列のようなものはない。それでも最低限の決まり事——法律や通貨単位などの統一は必要になる。それらの決定だけでなく、定期的な各シティの状況報告や、シティ単独で決めかねるような事案が発生した際、各シティの代表が此処ここオオミヤ・シティに召集される。

これがいわゆる中央政府である。

……………」

中央政府を構成する各シティの代表が列席する会議室は、重苦しい沈黙で満たされていた。た。

〈ブレケース〉襲来から四日。彼等は此処に缶詰め状態である。〈カラストロ〉対策がマニュアル化して久しいこの惑星ゼヘナで、初めてと呼べる大規模な事件に、中央政府のストレスは頂点ピークに達していた。

そんな状況で『また終わっていないかもしれない』という報告を受けても、〈ブレケース〉撤退に色めき立っていた彼等が取り合っはずもなく、ロゼット・コダールの名を襲名した稀代きだいの技術者の言葉は黙殺された。

そして今、さつそくその代償ツケが回ってきていた。

会議室の大型モニターに映された、機械のような灰色の蠍さそりの残骸。一緒に映っている回収班の姿と見比べれば、その巨大さが想像出来るでき。

「プレケース」より遙かに大きい。胴体だけで普通自動車サイズに見える。

ほんの少し前にオオミヤ・シテイのメインストリートに現れ、破壊と殺戮を繰り返した未知の存在。

「……しかし、これがロゼット女史の言っていた〈プレケース〉の目論見だもくろみという確証はないのでしょうか？」

「あの形状から見て、〈エリアD〉と無関係だと？ 私はそこまで愚かではないよ」

「よくもまあ、ぬけぬけと。ロゼット女史の報告を真っ先に切って捨てた張本人が」

「なんだと!? 他人の意見に従うだけで主体性のない日和見主義者が!？」

「あの、ここは穩便に……」

「意見を言えはいいと思ってるだけの考えなしに言われたくない！」

「貴様、表に出ろ!？」

「静粛に願います！ 会議の場では静粛に——」

「回収した蠍さそりの残骸の調査はどうなってるんです？」

「それより被害者への支援を——」

「帰りたい……」

会議は踊り、されど進まず。

国の行末を決めるはずの中央政府会議は、学級会の様相を呈ていしていた。



東方大陸最南端に位置する〈エリアD〉——通称・封鎖区域。

コアを抜かれないまま封印された機獣が眠る地である。

公おおやけには侵入が禁止されているが、周辺に検問や警備施設がある訳ではない。それでも興味本位で近付く者がいないのは、本能的な忌避感があるからだ。

あそこに近寄ってはならない——というよりも、其処そこに眠る機獣に近寄ってはならない。ゼヘナに生まれた者ならば、そう遺伝子レベルで本能に刻まれている。

だがそれは、その気になれば封鎖区域に侵入する事自体は容易たやすいという事でもある。

現に、昼前にオオミヤ・シテイを出立した、ファフロウ姉妹、増援のアイナとルイゼ、そして密航していたキリエの五人は、数時間のカーゴトレーラーでの移動を経て、目的地である封印施設の近くまでたどり着いていた。

「あれが封印施設か。ずいぶんと珍妙な形状だな」

停車したカーゴトレーラーから地面に降り立ったアイナ・ボーグマンは、前方に見える封印施設をそう評した。固い口調と声音だが、発する本人は至って小柄な少女である。

大人びた雰囲気だが、見た目通りなら十四、五歳くらいだろう。蒼い髪はショートヘアで、まっすぐに前を見据える黄色の瞳と相まって、中性的な印象を見るものに与える。

容姿は幼いが、見た目通りの可憐なだけの少女とも思えない、異様な迫方を感じさせる。

「そうかしら？ ワタクシには前衛的なデザインに見えますけども」

アイナに続いて現れたのは、彼女とは対照的な少女だった。

ルイゼ・ルンシュテッド。

余裕を含んだ甘い口調と、長身で豊満なスタイル。ともすれば二十代にも見える艶っぽさだが、不思議とアイナとそう歳が離れているようには感じない。緩く波打つ紅いロングヘアはさながら炎のようで、桃色の瞳の奥に垣間見える肉食獣の如き視線と相まって、彼女が妖艶なだけの花でない事を窺わせる。

〈獅子王〉アイナ・ボーグマン。

〈竜帝〉ルイゼ・ルンシュテッド。

どちらも二つ名持ちにして、有事における独自裁量の権限を与えられた、最上位クラスの〈機獣少女〉である。

「あの三角形が？」

「ええ。きつと意味があるのでしよう。たしか地球にも、ピラミッドとかいう巨大建造物があったはずですわ」

「何のためにこんなものを造ったのだ？」

「王族のお墓だったと記憶しています」

アイナが改めて封印施設を眺める。比較するものがない荒野——ゼヘナ全域に言える事だが——に、ぼつんと建っているため規模が判りにくいのが、とにかく大きい。アイナは三角形と表現したが、厳密には正三角錐で、一辺が二百メートルはあるだろう。

「権力者一人のためにこんな物を造ったのか。無駄の極みだな」

「かもしれないわね」

身も蓋もない友人の言葉に、ルイゼは苦笑を浮かべた。

アイナとルイゼがそんな会話をしていると、ようやくといった風情で三人の少女が姿を現した。うち一人は左右から肩を支えられており、疲労困憊といった様子である。

左右で支えているのはファフロウ姉妹で、真ん中で支えられているのがキリエ・ソウマだ。

「ギリギリ、大丈夫？ ネコミミ、触るっ！」

右肩を支えていた小柄な——アイナよりも小さい——少女、ベアトリーチェ・ファフロウが、頭部の三角形の耳をびよこびよこ動かして言った。

見た目通りなら十二、三歳。茶色のショートヘアと、猫のような黄色い瞳。非常に愛ら

しい容姿と表情だが、腰には頭部同様、猫のような尻尾が生えている。

一応、先の言葉はキリエを励ますために言ったのだろう。

「……結構よ。ていうか、『ギリギリ』って私の事じゃないわよね？」

まだ整わぬ呼吸のまま、キリエがそれでもベアトリーチェの言葉に答えているのは、負けず嫌いの表れか、もしくは意外と律儀な性格なのかもしれない。

「ギリギリ……アリですね」

ベアトリーチェの反対側でキリエの左肩を支えていたタオエン・ファフロウが、無表情に呟いた。

こちらはキリエとほぼ同じ身長と体格で、年代代である事が窺える。十六、七歳くらいだろう。緩く波打つ銀色のセミロングと、どこか神秘的な色を湛えた金色の瞳。ベアトリーチェの姉で、彼女の頭部には狐のような耳が、腰には尻尾が備わっていた。天真爛漫な妹とは正反対な伶俐な雰囲気を漂わせているが、意外とお茶目な一面も持ち合わせていたりする。

「アリじゃないわよ!! 勝手に変な紳名付けないでくれる!」

明るい茶色のロングヘアを力なく揺らし、切れ長の瞳で二人を順に睨み付ける——が、常にギラギラしているはずのキリエの薄い緑色の瞳には、今は生気が欠けて見えた。

「そんなんじや〈ブリューナク〉の二つ名が泣いちゃうよ？ がんばって、ギリギリ！」

「その通りです。〈ブリューナク〉と謳うくらいであれば、五人分くらいの働きはして見せなければなりませんよ、ギリギリ」

「——〈グングニル〉だつて言ってるでしょ?! 殺すわよ、あんた達!! あと、定着しちゃうからやめて!」

〈機獣少女〉としての実力はあるし、この器量良しのメンバーの中にいて埋もれないだけの容姿の持ち主なのだが、それだけに残念な部分が際立ってしまう。

それがキリエ・ソウマという少女だった。

そんな三人の様子を見て、嘆息するアイナと苦笑するルイゼ。

「まったく、ソウマはまず性根の方から叩き直してやる必要があるな」

「それにしたって、今でなくてもいいでしょうに。あの有様では有事の際に役に立たないどころか、足手まといになりますわよ?」

キリエの疲労困憊の理由——それはアイナが稽古をつけた事による。広いとは言えない貨物室——キリエが潜んでいた場所だ——で、MBジャケットを装着しない状態での組手をぶつ通して行った結果だ。

脂汗が浮かぶほどの正座の後に、休憩なしの二時間の本気の組手。

一応、密航に対する罰という事になっているが、よくよく考えてみればアイナにそんな権限はなく、しかしそれを指摘出来る者はこの場にいなかった。密航の理由——というか、どうやって封鎖区域に行く事を知ったのか、キリエは黙秘を貫き、それが余計にアイナの怒りを買った。誰だつてそこでキリエを擁護して、とぼちちりを受けたくはなかったというのが本音だ。

結局、何か悪意や企みがあつての事ではないだろうと、それで一旦キリエの扱いは保留となった。

まあ、キリエの姿は誰が見ても『もう充分だろう……』と、同情を禁じ得ない状態になっていたが……。

「……そこまでは考えていなかった」

「アナタ、意外と脳筋ですわよね」

「黙れ、蜥蜴女」

「はいはい、可愛い子猫ちゃん」

ぶすつとした表情でむくれるアイナだが、暴言を吐かれたルイゼは気にした様子もなく、むしろ慈愛の眼差しを彼女に向けていた。

「——キマシ！」

「タオ姉、空気読もうね？」

「……なんでもいいから……もう少し……休憩を——」

息も絶え絶えだったキリエの言葉が途切れた。

だがそれは疲労のせいではなく、急に足場の感覚がなくなり、浮遊感を覚えたからだつた。そして、それは彼女に肩を貸していたファフロウ姉妹も同様で——

——キィンシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

異音と同時に地面から現れた蠍の化物の群れ。

それらと入れ替わるように、三人はアイナとルイゼを残して地下の闇に姿を消した。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十六話をお届け致します。

日付を見てもらえば判りますが、七月七日に脱稿しております。

そう。今回は掲載日の一週間以上前に完成したのです。

やはり何事も早めに取りかかるべきですね。夏休みの宿題然り、大学のレポート然り(もう記憶がありませんが)、人生設計然り……なんだかとても死にたくなってきました。

さて本編について……進まない。実に牛歩。

一気に読める単行本であればそれでもありませんが、月一更新だと展開が遅いかもしくない。でも、しょうがない。キャラの心情が書きたいんですもの。

今回は封鎖区域メンバーを出せたけど、逆に主役とその親友の順番がなくなるという…

…これが等価交換？

いいかげん、名無しの《機獣少女》二人にも名前が必要かしら？

あなたなりの推しキャラを見つけてね☆

それでは謝辞で締めたいと思います。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

まだ続きますとも、ええ。

2017/7/7 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る